

名草戸畔と古代遺跡のお話

わたしが名草戸畔伝承と出会って感じたことは、この伝承は「生きている」ということだ。名草小学校には『日本書紀』に記されない伝承が演劇の台本（小藪繁喜氏が保存）の形で残され、「宇賀部神社」宮司家には、名草戸畔の物語が「口伝」によって、故・小野田寛郎氏の代まで語り継がれた。このような話を知らない人たちの間でも、名草戸畔遺体切断伝承が残る3つの神社（宇賀部神社・杉尾神社・千種神社）は、この土地で愛されてきた。名草地方（現：和歌山市海南市）の先住の女王は、紙の上にかかれた話だけではなく、伝承となって連綿と生きてきたのだ。

そんな伝承の舞台だけに、名草地方には古代遺跡が多量出土している。神奈備山として愛される名草山にはいくつもの古墳があり、三葛の郷土史家・小藪繁喜氏が大切に保存していた遺物が、2010年11月に正式に古墳の「天井石」と認定された。現在は「紀伊風土記の丘」に保存されている。

考古学遺物からは、先人たちがどんなに苦労して生きてきたのか、どんな思いで自然の神々に祈り人生に対峙してきたのかといったことを想像することができるだろう。しかし、遺跡が出てくれば即古代の様子がわかるわけでもない。それらの遺物をどう読みとくかにかかっている。名草地方に残る生きた伝承と数々の遺跡。これをどう理解していけばいいのか、答えは簡単には見つからない。大変な難題ではあるが、折しも今回の会場は、小藪氏が熱心に探索した名草山の麓、紀三井寺駅近くの和歌山地域地場産業振興センターだ。この機会に、名草戸畔伝承と古代遺跡についてお話してみたい。後半では西本真司先生にも、ぜひ、ホリスティック医療の観点から古代について学ぶ面白さなどについてお話いただければと思っている。

小藪繁喜氏と、1月に帰幽された小野田寛郎氏が残してくれた伝承から、さらに学んでいくことができれば本望だ。

なかひら まい

名草戸畔とは：名草地方（現：和歌山市・海南市）には、神武の時代よりはるか昔、名草戸畔（なぐさとべ）という女性首長がこの地を治めていたと伝わる。ナグサトベは、『日本書紀』巻の三「神武東征」の項に、たった一言「神武軍に誅（ころ）された」と記されている。土地には、ナグサトベの遺体を、頭、胴体、足の三つに分断し、三つの神社に埋めたという伝説が残されている。ところが、和歌山市出身の郷土史家・小藪繁喜氏が70年もの間保存していた、名草小学校の演劇の台本と、ナグサトベの頭を祀る「宇賀部神社（おこべじんじゃ）」宮司家出身・小野田寛郎氏の家に内々に語り継がれてきた「口伝」に『日本書紀』にはない伝承が残されていた。（『名草戸畔 古代紀国の女王伝説』増補改訂版 なかひら まい/著より）

なかひら まいプロフィール

1970年3月生まれ。作家・イラストレーター・ユング心理学研究会役員。セツ・モードセミナー卒業後、雑誌を中心にイラストレーターとして活躍。2005年12月『スプーと死者の森のおばあちゃん〜スプーの日記〜』（トランスビュー）で作家デビュー。以後、続刊、2007.06『スプーの日記2 暗闇のモンスター』、2008.01『スプーの日記3 地下鉄の精霊』を発表。2010年12月『名草戸畔 古代紀国の女王伝説』（スタジオ・エム・オー・ジー）発表（2013年5月増補改訂版発売）。2013年11月、毎日新聞大阪版にて挿絵付き童話『貝がらの森』を1ヶ月間連載。

『名草戸畔 古代紀国の女王伝説』ウェブサイト

<http://studiomog.ne.jp/nagusa/>